

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5538号  
12月号  
平成23年12月2日発行  
宮崎県  
宮崎地方气象台



## 【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	40	30
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

## 【概要】

平年に比べて晴れの日が少ないでしょう。  
期間の前半は気温の変動が大きい見込みです。2週目はかなり低くなる可能性があります。

向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

〈1週目の予報〉 12月3日(土)～12月9日(金)

天気は、数日の周期で変わり、3日と期間の後半に雨の降る日があるでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、高い確率60%です。

〈2週目の予報〉 12月10日(土)～12月16日(金)

天気は、冬型の気圧配置となりやすく、平年と同様に九州南部では晴れの日が多いでしょう。気温は、低い確率60%です。

〈3週目から4週目の予報〉 12月17日(土)～12月30日(金)

天気は、数日の周期で変わり、平年に比べて晴れの日が少ないでしょう。

## 普通作物

### ◆ 早期水稲

---

#### 1 土づくり

土づくりは、気象災害に強く品質の良い米づくりの第一歩です。近年は自給飼料として稲わらが収集され、その後たい肥を施用しないケースが多く、このため有機質不足により地力が低下してきています。

たい肥の施用については、前作物や土壌条件でも異なりますが、牛ふんたい肥の場合は10畝当たり1t程度投入します。ケイ酸質資材の投入は稲の葉茎を硬くし、受光体勢を良くしたり、倒伏やいもち病にも強くなる効果があります。

プラウ耕は作土層を深くする他に、防除の難しい多年生雑草の塊茎（イモ）を厳寒期の低温や乾燥にさらすことで死滅させる効果もあります。

深耕に努め根域を15畝以上確保しましょう。

#### 2 種子の準備

自家採種した種子は異品種の混入や、いもち病、イネシンガレセンチュウなど種子伝染性病害虫の発生の恐れがあるので、更新しましょう。

#### 3 害虫防除

スクミリンゴガイ対策として、冬場にロータリー耕を行うことで、地中の貝を破碎したり、低温による凍死で密度低下を図ることができます。発生ほ場ではロータリー爪の回転数を上げて低速で耕うんします。

### ◆ 麦類

---

#### 1 播種

平坦地での播種の適期は11月下旬から12月上旬ですが、適期から10日遅れるごとに播種量を地区基準の1割増量して、穂数を確保します。発芽やその後の生育で湿害を受けないよう、作溝して排水対策に努めましょう。

（鎌田 博人）

## 施設野菜

### ◆ 共通事項

---

暖房用燃料の節減対策は万全でしょうか？

すでに暖房機の点検やハウスサイドの高保温性資材の設置などの対策は取られていると思いますが、暖房機や自動開閉装置の設定温度と実際の管理温度に差がないか、今一度確認しましょう。また、内張ビニルのつなぎ目に隙間があると、暖房効率が大きく低下しますので、注意しましょう。

かん水は、晴天時の午前中に行い、地温低下を防ぎます。

### ◆ きゅうり

---

促成きゅうりの摘心栽培では、子づる～孫づる、つる下ろし栽培では主枝となる子づるの収穫期となります。

ハウス内の温度管理は全作型ともに、午前中26～28度、午後23～25度、夜間12～14度とします。

摘心栽培では採光・通風を良くするために、孫づるまでは規則的に摘芯し、ひ孫以降は成長点を2～3本確保しながら、込み合った場所の枝を中心に整理します。追肥は、10㎡当たり窒素成分で、月に5～6kgをかん水時に施用します。

つる下ろし栽培でも着果が安定してきたら、ハウス内湿度を確保するために、午前中はできるだけ内張りビニルの開閉による湿度調節を行います。

追肥は、摘芯栽培と同様に行います。

### ◆ ピーマン

---

促成ピーマンは収穫に合わせ、フトコロ及び側枝の整理を行きましょう。低位節から発生している徒長枝は根元から除去します。

第3～4分枝のフトコロ枝は、収穫が終わったら適宜切り戻します。第5分枝以降の側枝については2～3節で摘芯を行います。

追肥は、2月までは月に10㎡当たり窒素成分で3～4kgずつ行います。ハウス内の温度は、午前中26～28度、午後は24～26度とし、夜間は18度とします。

## ◆トマト

---

促成の丸トマト、ミニトマトともに収穫時期となります。追肥は、開花段ごとに10㎡当たり窒素成分で1kgを目安に行います。ハウス内の温度は、午前中26～28度、午後23～25度、夜間10～12度とします。ミニトマトはこれより1～2度高めに管理します。

## ◆いちご

---

いちごは、頂花房の収穫と第1腋花房（2番果）の肥大期となります。着果負担も大きく、草勢が低下すると第2次腋花房（3番果）以降の収量、品質に影響するため、遅れないよう追肥を行います。追肥は、液肥を主体に、月に窒素成分で10㎡当たり2～3kgを施用します。ハウス内の温度は、午前25～28度、午後20～25度、夜間5～8度を目標に管理します。

（郡司 孝幸）

## 葉茎菜類及びいも類

### ◆アスパラガス

---

地上部を刈り取る時期です。刈り取りは茎葉が完全に黄化した後が望ましく、おおむね12月下旬が適期になります。

しかし、下旬から1月上旬にかけて、株は休眠から覚めて萌芽できる状態になるので、早出しをねらう場合は、中旬までに刈り取りを終えましょう。

### ◆ごぼう

---

トンネル栽培は上旬には播種を終えましょう。発芽適温は20～25度で、30度以上では発芽率が低下します。そのため、高温になるとときには換気が必要です。特にトンネルビニルが新品の場合は、高温になりやすいので注意しましょう。

### ◆にら

---

促成栽培の収穫期です。無加温栽培では、過湿による白斑病の発生や凍害による葉先のヤケが心配されます。白斑葉枯病の予防的な防除を行い、発生源となる残渣をハウス外に持ち出すとともに、除湿保温に気を配りましょう。加温

栽培では、最低夜温を5度に設定しますが、刈り取り後3～4日だけは、10度に設定にすると、萌芽が早く、丈夫な株になります。

#### ◆レタス

---

ポリなどのトンネルの必要な時期を迎えます。レタスの生育適温は15度から20度です。トンネルの開閉はこの温度に合わせて行います。ただし、規模が大きくてトンネルの開閉が労力的に無理なときは、不織布等のべた掛け資材をレタスにかぶせた上で、トンネルの裾を常時すかしておく方法も可能です。ただし、特に冷える夜には裾を閉めることが必要です。

(河野健次郎)

## 果樹

### 1 常緑果樹

---

#### ◆露地柑橘の害虫防除

今年は秋季の高温により、かんきつ類のハダニが平年よりも多くなっています。ハダニやカイガラムシ類の越冬虫数を減らすため、マシン油乳剤を散布しましょう。この剤は、虫が呼吸する気門を塞ぐことで殺虫するので、効果の低下が見られません。枝や葉に十分な量を散布してください。なお、樹勢が弱った樹には冬の散布は避け、3月上旬頃に散布します。

#### ◆完熟きんかん

1月中旬からは、完熟きんかんの収穫が始まります。今年は、秋季の高温と多雨により、果皮が弱くなっています。これからの高温と高湿度は、水ぐされ症や裂皮の発生を助長しますので、昼間の温度は15度程度を目安に管理し、早朝の換気により、施設内湿度を低く維持しましょう。

#### ◆マンゴー

最初に出てくる花芽は、分化が不十分なため、花と共に葉も着生します。芽が小さいうちに葉を切り落としましょう。1から2割の花穂で開花が始まったら、受粉用のハチを導入します。曇りや雨の日が多いと、温度が足りずにハチの飛びが悪くなるだけでなく、葯(花粉の入った袋)が開かずに花粉

が出てこないなので、結果不良やミニマンゴー発生の原因となります。昼間は25度以上に温度を上げて、ハチの活動と開葯を促進しましょう。

## 2 落葉果樹

---

### ◆元肥の施用

落葉果樹は、かんきつ類などの常緑果樹と違い根の活動が始まるのは2月上旬頃と早い傾向にあります。このため、なし、くり、かきなどは年内に元肥を施用しましょう。

### ◆くりの剪定

剪定は落葉後に行います。主枝を2～3本にして、1つの主枝に垂主枝を2～4本程度確保します。樹高が3.5m以下になるよう主幹部の切り下げを早い時期に行います。大玉多収生産のためには、太さ8mm以上、長さ50cm以上の結果母枝を1㎡当たり5本程度になるように整理します。

## 3 果樹園共通

---

### ◆石灰の施用

土の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害して、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、酸性の場合は石灰質資材で調整しましょう。

(山口和典)

## 花き

### ◆花き全般

---

11月は曇雨天や高夜温が続いたため、さまざまな生育障害が発生し、栽培管理が難しい月でした。12月前半も気温が高くなる可能性がありますので、昼間の換気の徹底や病害発生に備え、定期的な予防散布等を実施してください。

### ◆電照ギク

---

品種、作型、生育ステージにあった温度管理をしっかりと行って、品質の高いキク生産に努めましょう。県総合農試選抜「神馬66-4」の基本的な栽培管理は「神馬2号」と同じになります。「神馬」系統は電照期間中に10度以下の低温に遭遇すると開花遅延を起こしやすい品種です。消灯までは

夜間の温度を13度（実温）で管理する必要があります。低温に遭遇した場合は、消灯2週間前からの夜温15度で予備加温を行ってください。消灯後は18時から1時までは15度、1時以降は12度の変温管理を行うと大幅には開花が遅れず、暖房コストの削減が可能です。

#### ◆スイートピー

---

本年は10～11月の曇雨天、高夜温による落蕾・落花、高温による生長点異常等が発生し、例年よりも出荷が遅れています。生育が不安定となっているほ場も多いので、ほ場条件や品種を考慮し、つる下げや腋芽の除去、葉面散布の活用によって草勢管理を行い、本格的な出荷に備えましょう。また、花シミや灰色かび病を防止するために、微生物農薬の活用や暖房制御装置の効果的な活用を行いましょう。

#### ◆デルフィニューム・エラータム系

---

収穫前から2番花の抽だいが始まっている株もありますので、出荷計画にあわせた温度・肥培管理を行ってください。1番花出荷終了後の夜温管理は、ロゼットを回避して1～2月に出荷を行う作型では抽だいまで15度、ロゼットを打破して3～4月に出荷を行う作型では一定期間低温でロゼットを打破した後、10～15度で加温を行ってください。さらに電照を行う必要もありますので、地域の農業改良普及センターに相談しましょう。

#### ◆ホオズキ

---

早い地域では1月から植え付けが始まります。ほ場の消毒や、親株の地下茎の堀上・調整など準備を始めてください。特に白絹病等の立ち枯れ性病やネコブセンチュウが発生したほ場は十分な土壌消毒を実施し、植え付ける地下茎の選別・消毒を十分に行ってください。

#### ◆ラナンキュラス

---

内ビニールの開閉をしっかりと行い、昼間は換気を徹底して品質の向上に努めましょう。ハウス内の気温を下げすぎると生育が停滞し、収量があがらないので15～20度を目標に温度管理を行いましょう。1番花の収穫が始まると草勢が低下するケースが見られますので、硝酸態チッソの割合の多い液

肥を適宜施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を行いましょう。

(中村 広)

### 畜産・飼料作物

冬場に入り、朝夕の気温が急激に低下する時期です。寒さや温度変化は家畜の生産性を低下させますので、防寒対策をしっかり行いましょう。特に子牛・子豚などの幼畜は寒さに弱いので、隙間風が直接当たらないようにするとともに、必要に応じて加温施設を設置します。

冬場は換気不足になりがちです。牛舎内にアンモニアガスなどが充満すると、家畜の生産性が急激に落ちる原因にもなりますので、気温の上がる日中に畜舎カーテンを開け、換気扇やファンを回すなどこまめな換気を行いましょう。床が乾燥しすぎると、まいあがった埃や塵を家畜が吸い込み呼吸器疾患を発生しやすくなりますので、極細かな霧を噴霧するなど程度な湿度を保つように心がけてください。

冬場の牧草は、硝酸態を比較的多く含むものがあります。特に緑が濃いものは要注意です。家畜が硝酸塩中毒にならないように、普及センターで事前にチェックし、安全を確認した上で給与するようにしてください。

ここ数年、国内において鳥インフルエンザの発生が見られます。本県においても今年初めに高病原性鳥インフルエンザが発生し、県内の畜産に大きな打撃を及ぼしたところです。鶏舎や農場内の石灰散布と、防鳥ネットの点検・補修を徹底し、野鳥や野生動物の侵入を防ぎます。ウイルスはヒトや車両からも侵入するので、農場内への出入り時には衣服の着替えや、車両の消毒を必ず行います。沢水や井戸水を利用している農場では、定期的に水質検査を実施し、塩素剤などで消毒しましょう。

(須崎 哲也)



## 特用作物

### ◆茶

---

#### 1 越冬芽の凍害対策

越冬芽については、整枝後の高温傾向により、遅れ芽や再萌芽が見られ、一部寒害が見られます。今後、耐寒性が徐々に獲得されますが、急激な低温も予想されますので、被害を受けやすい早生品種や中切り園を中心に凍害（芽つぶれ）発生に注意が必要です。

防霜ファンやスプリンクラーを利用した防寒対策の温度設定は12月は0度ですが、センサーの温度チェックと越冬芽の耐寒性を確認しながら実施します。

#### 2 越冬ダニ防除

春先に急激に増殖し、一番茶芽への影響が大きいカンザワハダニは、冬期でも産卵や幼虫ふ化が見られるため、越冬前後の防除による密度低下が重要なポイントになります。

防除の際は、裾部や葉裏への散布状況を確認しながら、防除基準を遵守し、散布してください。

#### 3 新改植園の準備

新植園の枯死や生育不良園となるのは、浅植えによる乾燥や除草、病虫害防除等の管理不足、凍寒害の影響の他、土壌のアルカリ性が高い場合や排水の悪いほ場が原因と思われる。

品種、ほ場の選定とあわせて土壌の物理性、化学性の改善を図るため、土壌調査を実施し、適正な施肥に努めてください。

茶の有効土層は60センチですが、細根（白色根）は10センチ程度伸びると言われています。このため、少なくとも60センチ、できれば10センチ以上の深耕、天地返しなど混層改良を行います。

（岩切健二）

### ◆しいたけ

---

#### 1 原木の玉切り

原木伐採後、1～2ヶ月程度の葉枯らし乾燥が済んだら玉切り作業を行います。玉切りの適期は、①若木では、木口面に半径の3分の2程度、老齢木では樹皮近くまでひび割れ

が入ったとき②小枝を折り曲げるとササクレ状に折れるとき  
③小枝の内樹皮が褐色に変わるときとされています。

## 2 植菌

玉切り後は、害菌や害虫の侵入防止のため早めに植菌を行います。困難な場合には、原木を直に地面に置かないように集積し、笠木等で覆い、直射日光と乾燥を防ぎながら、植菌までの間適切に管理します。

種菌の種類は、種駒、成型駒などがありますのでそれぞれの種菌の性質を理解し、栽培条件や栽培目的に合った品種を選定します。

植菌数は末口直径（cm）の2倍以上とされており、間隔は縦に長く、横に短くし、千鳥状に行います。原木の太さによって数を増やしたり、樹皮に傷がある場合や枝の切り口がある場合には周囲に余分に植菌して、害菌の侵入を防ぎましょう。

（田中 貴司）

### ◆葉たばこ

---

本年も、品質・収量の安定化に向けての取り組みに努めていただき、ありがとうございました。

今月も来年作に向けての準備が主な作業となります。

- 1 病原菌密度の低減と土壌消毒剤の効果促進を図るために、ロータリーを用いた冬期耕うんを最低3回以上は行いましょう。
- 2 土壌消毒を実施する際には、農薬使用基準に沿って薬害、公害のないよう最大の注意をはらいましょう。また、ピクリン剤で全面消毒を実施する場合は植付3ヶ月前までとし、特に本年作にグレー葉が生出したほ地では使用時期と使用量に十分注意しましょう。
- 3 練り畦防止のために、土壌水分の良い時期に施肥畦立等を行いましょう。また、病害の耕種的防除と除塩対策のために、溝堀機等を用いて排水溝を完備しましょう。
- 4 異物・異臭・虫害防止のために作業場および貯蔵庫の清掃を徹底しましょう。

（中矢恭輔）

#### 内容の詳細について

1 2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び環境森林課、日本たばこ産業南九州原料本部が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。  
(<http://mawi.sakura.ne.jp/>)

## なになに農業アラカルト

うり類の黄化えそ病（MYSV）の発生が急激に増えています。

適切な準備と対策を!!



### ◆はじめに

---

この病気はミナミキイロアザミウマが媒介するウイルスによるもので、うり科作物に感染し、特にきゅうりやメロンでは、感染した株の葉は枯れ、場合によっては果実を奇形にするため、栽培初期に感染すると収量が著しく低下することになり、きゅうりやメロン産地に大きな被害を及ぼす恐れがあります。

この事態に県では、今年10月に「病虫害発生予察注意報」を発表し、県民に広く注意を呼びかけているところです。

ウイルスの地域での拡散防止とほ場での感染拡大を防ぐため、適切な準備と対策を行いましょう。

### ◆対策の基本は「入れない、増やさない、出さない」

---

#### ①「入れない」対策

防虫ネットや近紫外線除去フィルム、光反射マルチなどを利用して、育苗段階を含めウイルスを持ったミナミキイロアザミウマがほ場に侵入する数をできるだけ減らします。

ほ場の中や周囲に雑草があると、そこがウイルスの伝染源になる恐れがあるため、可能な限り除草します。特に、ハウスサイドの保温ビニルの間や暖房機等の機材の下は見逃しがちなので要注意です。

ミナミキイロアザミウマの初期防除を徹底するため、育苗時及び定植時の粒剤の使用も効果的です。

## ② 「増やさない」対策

ウイルスに感染した場合、その株が伝染源になるため、早急に抜根しなければなりません。感染した株を早く発見して抜根すると、数株の発生で終息することがある一方で、感染株を放置したために数百株単位で発生し、改植を余儀なくされる事例もあります。

また、ウイルスがまん延しないように、ウイルスを媒介するミナミキイロアザミウマを適切に防除することも必要です。薬剤による防除を行う場合は、7日間隔の3回散布を徹底しましょう。使用する薬剤については、薬剤の効果が地区によって異なるため、地区の最新の防除暦を確認し選択しましょう。

ただし、ミナミキイロアザミウマは農薬に強いため、化学農薬だけでなく、微生物や天敵、粘着版等を活用した総合的な防除対策を行う必要があります。

## ③ 「出さない」対策

次作や近隣のほ場に伝染することを防ぐために、ほ場から出さない対策も重要です。栽培終了時に施設を閉め込んで太陽熱で殺虫したり、残さを適切に処分してウイルスがほ場の外に出ないようにしましょう。

## ◆ おわりに

キュウリ黄化えそ病の蔓延防止のためには、いろいろな手段を組み合わせた対策が必要になります。確実な防除効果が出る準備と対策を実施しましょう。

(生産環境担当)



## 1 2月における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害一般	－	暖房経費低減のため、ハウスを多層被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。
	タバココナジラミ類	並	タバココナジラミ類は、低密度でもトマト黄化葉巻病やウリ類退緑黄化病などのウイルス病を媒介します。また、効果のある薬剤が少ないため、早期発見・早期防除に努めます。
冬春きゅうり	べと病	やや多	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底します。 うどんこ病は乾燥時に多発するので、ほ場内が過乾燥にならないように管理します。
	うどんこ病	やや少	
	褐斑病	並	褐斑病の発生は平年並ですが、べと病、うどんこ病の発病後に激発することがあるので注意が必要です。
	黄化えそ病 (MYSV)	－	キュウリ黄化えそ病(MYSV)の発生が施設栽培等で確認され、今後感染の拡大が懸念されることから厳重な警戒が必要です。発病株を確認した場合は直ちに抜き取り適切に処分するとともに、本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	－	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は少なくとも20日間蒸し込みます。 また、前作に褐斑病などの発生があった場合には、後作きゅうりの定植後直ちに予防防除し、感染を防ぎます。
冬春ピーマン	斑点病	やや多	うどんこ病を除く病気の発生が多くなっています。多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の温湿度管理、排水対策等を徹底します。 一方、うどんこ病は乾燥時に多発するので、施設内が過乾燥にならないように注意します。 いずれの病害も、予防・初期防除を徹底し、罹病した枝葉は感染源となるので発見したら直ちに除去し、ほ場外に持ち出します。
	うどんこ病	並	
	菌核病	やや多	
	黒枯病	前年、前々年より多い	
	アザミウマ類	やや多	多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病	並	青枯病の発生がやや多い状況です。発病株を確認した場合は、隣接する株も含め速やかに抜き取り、圃場外に持ち出し適切に処分します。 トマト黄化葉巻病の発病株は伝染源になるので、必ず株全体を抜き取り土中に埋めるか、ビニル袋に入れて枯れるまで密閉します。本病を媒介するタバココナジラミ類の早期発見・防除に努めるとともに、施設内に黄色粘着トラップ等を設置し密度を抑制します。
	青枯病	やや多	
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	前年、前々年より多い	
冬春いちご	うどんこ病	やや多	うどんこ病は予防に重点をおき、また、罹病葉・果実は伝染源となるので速やかに除去します。 炭疽病の発生がやや多い状況です。発病した株は早期に除去し、新たな感染を防止します。
	炭疽病	やや多	
	ハダニ類	やや多	寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。なお、薬剤感受性が低下しやすいので同一系統薬剤の連用は避けます。
	アブラムシ類	並	
かんきつ類 (露地栽培)	ミカンダニ	やや多	冬季のマシン油乳剤の散布は、薬剤感受性の低下には影響がなく、また、カイガラムシ類との同時防除が可能であるので、樹勢等をみながら実施します。
茶	カンザワハダニ	やや少	冬季のマシン油乳剤の散布が効果的です。

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。  
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。